

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 橋爪大輝

本論文は、ハンナ・アーレントの哲学的な主著『活動的生』(1960年)ならびに『精神の生』(1978年)を内在的に検討し、複数的な人間的生の構造を解き明かしたその哲学の体系的な解釈を試みるものである。考察はかくて、認識、行為、政治、世界、精神の活動性といった生の諸契機を、一つひとつ解明してゆくものとなる。

第1章は主に『精神の生』第一巻・Iを検討して、アーレントの現象概念を分析する。現象とは知覚されるものであって、知覚する者の視座に応じてひとつのアスペクトを示す一方、その実在性が共通感覚を介して成立するがゆえに、現象を知覚する経験は、すでにそれ自体共同的である。第2章は『活動的生』第五章を検討しながら、アーレントの行為概念を解明する。行為はその経緯と行為者の意図によって言語的に分節化されているが、他方で行為はまた、現象として他者たちに曝され、さらには行為者には知りえない「意味」をもはらむ。そうした行為は、物語によって、遡及的にのみ開示しうるものなのである。第3章は『活動的生』第五章に依拠して、アーレントの政治的行為概念を検討する。まず約束が人びとの行為の連鎖を制御し、意識的な連携に転化する機制が示される。つぎに、約束に基づいて、固有な権力概念が説明される。権力は潜在的な行為連携として公的空間を産出するが、この行為連携を約束が形成するからである。ここに権力と政治の、いわば原風景がある。第4章は『活動的生』の第三・第四章の議論を検討し、アーレントの世界概念の解明が試みられる。世界は、①現象の世界、②関係の世界、③物世界、の三契機を有するとされるが、橋爪氏の独創はとりわけ、物世界のうちに、アーレントの世界概念の基軸を見るところに認められる。物世界を構成する〈もの〉は、自然に抗して制作され、人間的諸関係のあいだに置かれることによって有用性、さらには持続性という特徴を獲得することになる。アーレントによれば、自己差異化のなかで一貫性を求める思考の活動性が、同時に良心として働くと共に、思考とは異なる精神の様態として、意志が成立する。本論文は、かくてその最終章で、アーレントの未完の意志論に明確な見通しを与えようとするものとなるだろう。

アーレントの思想は、本邦ではとりわけ政治思想史研究者の関心を惹き、一定の蓄積がなされてきた一方、その思想の全体像を哲学的・倫理的視点から明らかにする研究は、なお立ち遅れている。本論文は、やや未整理で未展開な部分を残しているとはいえ、アーレントに関する哲学的・倫理的な研究として他に類例を見ないものであり、以後の研究の礎を築こうとするものであることについては疑いを容れない。よって本審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位を授与するに相応しいものと判断する。